



Title	Metaphor of Emotions in English : With Special Reference to the Natural World and the Animal Kingdom as Their Source Domains
Author(s)	大森, 文子
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/60054
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【24】

氏 名	おおもりあやこ
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	第 25700 号
学位授与年月日	平成 24 年 9 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文名	Metaphor of Emotions in English: With Special Reference to the Natural World and the Animal Kingdom as Their Source Domains (英語感情メタファー：自然界と動物界の根源領域をめぐって)
論文審査委員	(主査) 教授 大庭 幸男 (副査) 教授 岡田 穎之 名誉教授 河上 誓作

論文内容の要旨

本論文は、人間の精神、とりわけ感情を理解するための概念メタファーの構造と写像の仕組を認知言語学の枠組で探究するものである。大規模コーパスのデータ、英詩などの文学作品、辞書類の小規模コーパスに記載された慣用表現を研究対象とし、日常言語と文学の言語の成立基盤となるメタファーの認知メカニズムを探究する。全体は 8 章からなり、総頁数は英文で A4 判 224 頁（400 字詰め原稿用紙に換算して約 650 枚に相当する）である。

序章に続く第 1 章では、英米の詩作品を対象とし、〈水〉のメタファーによって感情を描く詩を観察する。Shakespeare の *A Midsummer Night's Dream* 5 幕 1 場で語られる詩人の想像力についての議論を契機とし、水の流れの様態の観点から精神活動を捉える詩的メタファーの分析を行う。そして、創造的認知プロセスである想像力の働きやそれを支える人間の感情的側面が、言葉の日常的な意味の中にどのように包含されているのかについて考察し、水の様々な様態が感情の様々な側面に構造的に写像されることを示す。

第2章では、本研究分野で大きな成果を挙げてきた Zoltán Kövecses の感情メタファーと感情のプロトタイプに関する主張について批判的に考察し、従来の内省にもとづく方法論では示されなかつた新たな発見を報告する。まず、「根源領域を表す語 + 前置詞 *of* + 感情を表す語」という表現パターンに当てはまるメタファー表現を British National Corpus (BNC) から収集し、<自然現象>が根源領域となる頻度が最も高いことを示す。さらに、自然現象をさす媒体を四大元素（空気、水、火、土）ごとに分類し、海や河川などの<大量の動く水>をさす媒体が最も多いことや媒体として用いられる水の形態の規模が小さくなるにつれ用例数が少なくなることを示し、新たな認知モデルを提示して、感情のプロトタイプに近い個別感情が定説とは異なることを明らかにする。

第3章では、<歓喜>、<悲哀>、<希望>、<恐怖>、<絶望>といった個別感情概念を扱う。個別感情語が自然現象をさす語と前置詞 *of* で結びつく表現パターンを BNC より収集・分析し、感情同士の意味的関係が、メタファー写像において特定の根源領域あるいは領域内の要素の「存在」のみならず「欠如」によっても特徴づけられること、一般的に対義とは認識されない感情ペアの対義関係が根源領域の相違の観点から特徴づけられること、そして一般的に類義とは見なされない感情同士の類義関係が写像の類似性の観点から明らかになることを示す。

第4章では、辞書類に掲載された感情イディオムや文学テクストに見られる感情メタファー表現の中から、動物関連語を媒体とするものを対象とし、<動物>領域と<感情>領域との間の写像の構造とその特性を探る。また、特定のテクスト内のメタファーの一貫性について観察し、同種の動物を媒体として用いても、その動物に対する詩人の捉え方如何によって描かれる感情が微妙に異なるという、写像の多様性について論じる。

第5章では、四足獣をさす名詞やその行動・生態をさす動詞を用いて人間の性質や行動を表すメタファー表現について考察する。ヨーロッパの文学や思想の背景として広く知られた「存在の大連鎖」という文化モデルでは人間を動物より高度な存在として上位に位置づけるが、個別の動物に対する人間の認識はしばしばこのモデルの呪縛から解放され、人間を超える動物の身体能力、知的・審美的・道徳的優越性についての認知がメタファーの写像に関与することを論じる。

第6章は Milton の *Paradise Lost* におけるサタンを描写する比喩表現群を取り上げる。それらは、大天使であったサタンが神に対し反乱を起こしたために地獄に落とされ、神への復讐を画策し、楽園に侵入し人間を堕落させるという物語の進行について、サタンの姿と内面が徐々に醜悪なものに変化していく様子を、比喩媒体の変化（天体から人間、猛禽、四足獣、下等動物などへ）によって生き生きと描写する。それらの叙事詩的比喩の背景には、宗教的価値観および道徳性に関する概念領域を自然界の事象の文化的価値づけに関する概念領域により理解する概念メタファーが機能している。本章では、それらの概念メタファーとサタンの感情の変化との関係について考察し、メタファー写像の構造性を浮き彫りにする。そして、終章は本論文の結論である。

論文審査の結果の要旨

本論文は、感情という人間の精神を理解するために、概念メタファーの構造と写像の仕組を認知言語学の枠組で探究している。本論文の評価すべき点は次の通りである。まず、従来の認知メタファー論研究が用いてきた内省にもとづく直観的データではなく、コーパ

ス、辞書類、文学作品など、様々なジャンルのデータソースから実際の用例を収集・分析して、新たな認知モデルを提示するとともに、感情メタファー写像の構造とその特性を解明している。また、先行研究では見られない斬新な切り口、すなわち「根源領域を表す語 + 前置詞 *of* + 感情を表す語」という表現パターンをもじいて大規模コーパスを検索することにより、感情メタファーのプロトタイプやその属性についての独創的で説得力のある結論を導き出している。同時に、<歓喜>、<悲哀>、<希望>、<恐怖>、<絶望>といった個別感情概念にも着目し、感情ペアの対義関係や類義関係を上記と同じ手法を用いて緻密な分析を行い、新たな見解を示している。さらに、人間に身近で豊かな要素を含む<動物>領域に焦点をあてて、「存在の大連鎖」を用いた従来のメタファー論では看過されていた事実、すなわち、動物の人間より優れた身体的・知的能力等にもとづいてメタファーが用いられていることを指摘している。これに加えて、Milton の *Paradise Lost* におけるサタンを描写する比喩表現群を取り上げ、概念メタファーとサタンの感情の変化との関係について、メタファー写像の実態を見事に明らかにしている。

以上が評価すべき点であるが、本論文には問題がまったくないわけではない。たとえば、感情のプロトタイプの決定は、コーパスの検索結果の頻度数にもとづき行っているが、他方では頻度数をプロトタイプ決定の要因と考えないとする記述も見られ、プロトタイプ決定の主たる要因を選定する上で多少のぶれがある。また、調査の中には実用例が少ないものがあり、充分な一般性を導くためにはさらなる追加調査、データの補充が望ましいと思われる部分が残されている。さらに、本論では、感情メタファーの仕組を解明する手法として「根源領域を表す語 + 前置詞 *of* + 感情を表す語」の表現パターンを採用しているが、それ以外の手法でも同じ結果が得られるかどうかについて検討する余地がある。

しかしながら、これらの問題点は本論文の卓越した成果を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。